

# なぜ四隅が突出していているのか？

## 「四隅」に見られる二つの特徴

弥生時代の墓は、土地を四角形に区画するのがふつうでした。四角でシンプルな墓が主流の時代に、山陰地方ではなぜ四隅を突出させた四隅突出型墳丘墓（以下「四隅」）を造ったのでしょうか。

近畿地方より東の地域では、四方に溝をめぐらせて土地を区画し、若干の墳丘を持つ方形周溝墓と呼ばれる墓がたくさん造られます。しかし、なかには墓の中にはいつていぎやすういふつに溝の四隅部分を掘らずに残しておくものも発見されています。

「四隅」の形は、時代や地域によって多少違います。発生地にあたる中国山地の「四隅」には、わずかな突出部しかありませんが、全盛期「」に造られた出雲・安来など平野部の「四隅」は、長大な突出部を持ち、「」のよう形状をしています。

また「四隅」は、墳丘の裾に列石を整理と並べ、墳丘斜面には石を貼っているのも特徴的です。石を貼ることによって、外観はまるで石の山のようになり、見る人を圧倒する迫力を持っています。

「」のような完成された貼石構造と突出部を持つ墓は、日本では出雲を中心とした山陰地方だけに見られるものです。「四隅」は、弥生時代後期の山陰地域の社会や発達を探るうえで欠かせないカギを握っている遺跡なのです。



四隅は溝を掘らず、墓の中にはいる「道」を残した方形周溝墓（権田原遺跡：神奈川横浜市）



弥生時代の主流・まわりに溝を掘った方形周溝墓（服部遺跡：滋賀県守山市）

# 出雲の王「たち」の交流

## 各地から出雲に運ばれた品物

弥生時代の終りになる頃、「四隅」をはじめとする山陰地方の有力者の墓には、地元土器以外に、岡山県南部から持って来たと考えられる「特殊器台」と呼ばれる大きな土管のような土器と、その上に載せられる「特殊器」のセットが並べられることがあります。「これらの土器は、山陰では見られない変わった文様が飾りつけられている」と、墓で出土するものが多いことが特徴です。

さらに近年、島根大学によって調査された出雲市大津町の西谷3号墓では、地元土器や岡山県で作られた特殊器台や特殊壺だけでなく、丹後地方から北陸地方にかけての日本海側にルーツをもつ北陸系土器も出土しています。

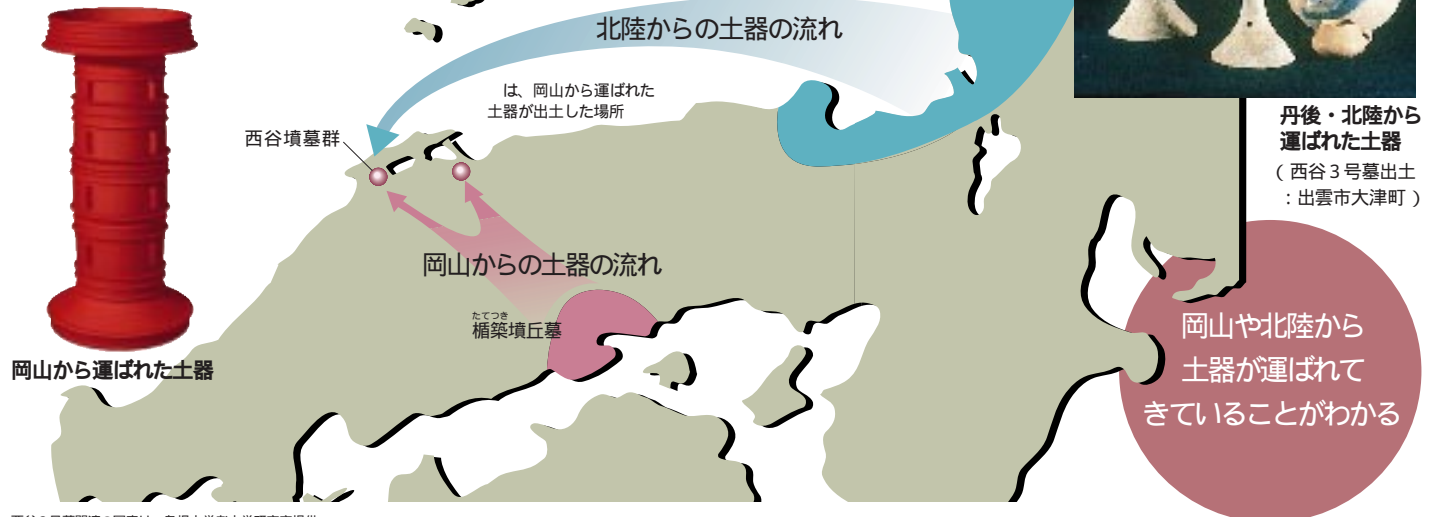
岡山県内で見つかっているこの時代のもっとも大きな墓は、倉敷市にある楯築墳丘墓ですが、この墓は木製の棺のまわりをさらに木で囲うという、出雲市の西谷3号墓と同様の二重構造をしています。また、棺の底には「水銀朱」という赤い顔料が敷きつめてありましたが、これは中国地方では産出しない顔料で、西谷3号墓の上にも置かれていた石にも付いていたものも。

「四隅」は山陰独自に発展を遂げた墓ですが、他の地域からいろいろな品物が運ばれていたり、部分的に他の地域の墓と共通する構造を持っています。「四隅」は、多くの地域との関係の中から造られた墓とも考えられます。



## 四隅突出型墳丘墓から出土した他地域の土器

地元の土器（西谷3号墓出土：出雲市大津町）



西谷3号墓関連の写真は、島根大学考古学研究室提供



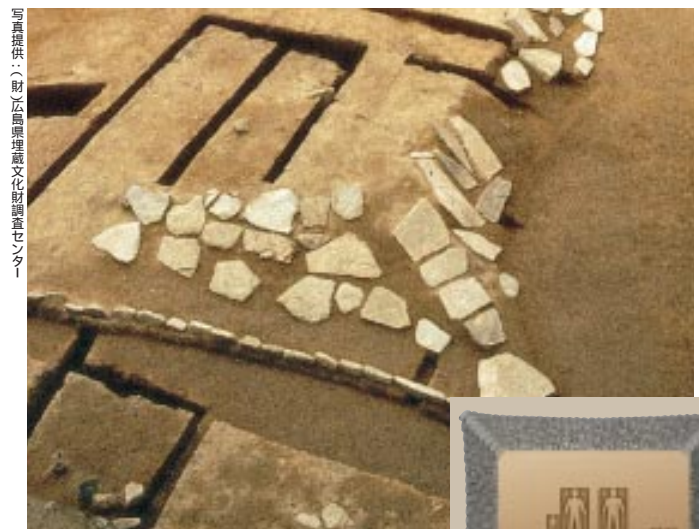
出雲の王の広い交流を物語るガラス製の首飾り（西谷3号墓出土：出雲市大津町）  
このガラス製の首飾りは、いったいどこから運ばれてきたのだろうか。この玉以外にも西谷3号墓からは北陸で造られた碧玉製の首飾りも出土している。

## 出雲の王墓と岡山の王墓

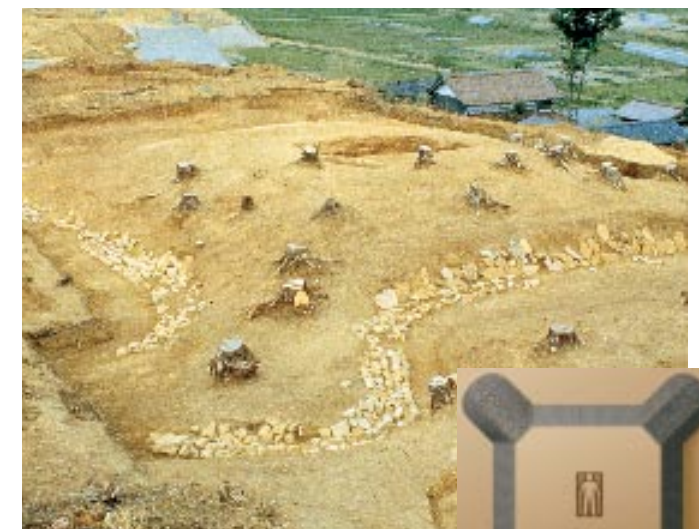
両地域を代表する大墳丘墓で、どちらも棺が二重構造で、棺の底に「水銀朱」という鮮烈な朱色の顔料が厚く敷かれている。さらに西谷3号墓からは、岡山産と考えられる特殊器台・特殊壺が出土しており、両地域に密接な関係があったことを物語っている。



西谷3号墓の埋葬施設（出雲市大津町）



頂上に登るための通路のように石を貼りつけた、初期の四隅突出型墳丘墓（殿山38号墓：広島県三次市）



四隅が大きく飛び出し、墳丘の斜面や裾に膨大な数の石を貼りつけた、全盛期の四隅突出型墳丘墓（宮山4号墓：安来市西赤江町）